
小田と加賀。

高槻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小田と加賀。

【Nコード】

N8498F

【作者名】

高槻

【あらすじ】

新しいクラスで前の席になったのは、ツンツン男。俺はどうしてか仲良くなりたくて――。南高シリーズ。全10話。「一部改稿

」

第一話（前書き）

この話はボーイズラブです。同性愛に嫌悪感がある人注意。ほのぼのストーリー。のんびり×ツンツン。【一部改稿】

第一話

わー、ツンツンしてらあ。

第一印象はそれ。

■ ■ ■

高2の春。

クラス替えでどうなるかなー、とか思って席についてぼーっとしてたら、前に座ったのが小田。

頭は無造作。

ピアスは耳に二つずつ。

確か、前1組の奴で、・・・喧嘩っ早いつて有名な。

窓際で固まっている女子が、少し沸く。

この学校の女子は結構レベル高いとは思っけど、どーしてあんなに騒げるのか不思議。

俺としては、おしとやかーな女の子が好きなんだよね。

「小田君はどう思うー?」

「・・・あ?」

声を掛けられるのが余程以外だったのか、どこか苛付きを含んだ声で返事をした。

隣の席に座っていた女子が、少しだけビクついたのが分かった。

「女の子はさー、可愛い系が好き？それとも強気美人系？」

その問いには答えてくれなかった。

「小田君は中身ツンツンかー。てかさー、呼び捨てでも良い？君付けてなんか寒いよねー」

・・・舌打ちが聞こえた。

「ちよっ、それはひどくねー？せっかく席近いんだからさー、仲良くしよーよー」

それでも無視され続けて、仕方ないから俺も黙るしかない。

「おー、かがやん。おっはー」

振り向くと、1年の時同じクラスだった吉田がひらひらと手を振っていた。

「おはよー。そっかー、吉田も2組かー」

「松本も2組だよ」

「まじで」

「そろそろ来^くつけど・・・あー、来た来た」

「・・・なんか暗いけど、どうしたん？」

「あー、林田とクラス違うからじゃね？林田1組なんだよ」

「うわー」

「いや、それはこの際良いんだ。」

「へ？」

「巧太の奴・・・ッ、1組の前で抱きつきやがってッ」

怒り心頭のご様子。

てか、林田ってそんなキャラだったけ？

吉田も不思議なように首を傾げている。

「春休みを経て、林田の性格変わったんじゃない？」

「なんかあったのー？」

「んなつつ、何にも無えよっ！！」

あー・・・。

何かあったって言うてるよー、それ。

顔真っ赤だし。

そこで前から寝息が聞こえてきた。

知らず、声のトーンを落とす。

「前誰？」

「んー、小田くんー」

「へえー」

「それだけー？」

結構有名人だから、もうちょっとなんか言っと思ってたんだけど。

「だって、お前だったらトラブルにならないしなあ」

「そうそう。かがやんのんびりしてるからね。」

「聖母様？みたいな？」

その形容どうよー？

第二話

良き晴天。

こんな日はー、

「50M走測定します」

とまあ、前回の授業で連絡あったように体力測定。

■ ■ ■

出席番号順だから、早々に自分の測定が終わって体育館の外壁にもたれてた。

5月の日差しって、なんでこんなに暑いんだー？

日陰を目指して北側の壁に回りこむ。

「あー」

そこには先客がいた。

小田が座り込んでいた。

「小田も休憩ー？なんか今日暑いよねー」

・・・だんまりさん。

座り込んでいるもんだから、今日も健在なくしゃくしゃ頭が見下ろし放題。

「小田さあー、この髪型どれくらい時間掛けてるのー？」

「ッ、触ってんじゃねーよっ！！」

怒られたけど、なんか触り心地が良いことに引き付けられる。

「ちよっ、触り心地超イイんですけど。何使ってるのー？」

うちの猫を撫でるみたいに、つい撫でてしまう。

・・・？

怒鳴らない????

さっきはあんなに怒ったのに、今は何にも言わないでいるのが不思議で、なんか俯き加減の顔を覗き込む。

「！！！」

だって、顔真っ赤。

えー、何その反応！！

ちよっ、えーっ！！

思わず固まっていたら、小田がはっとして、俺の手を振り払って去ってしまった。

ちよつ、えーっ！！

あんなでかい奴が可愛いと思ってしまった。

わあ、新発見。

■ ■ ■

「やっぱり松本は速えよなあ」

「毎日練習してんもん。長距離の方が得意だけど」

「サッカーは持久力勝負だもんない」

「てか、かがやん何処行つてたの？」

「んー・・・、日陰で休憩。それより林田は何処まで付いて来るのー？」

「更衣室だよ」

「あー、なんだー。ストーカーかと思ったー」

「加賀、お前って結構ひでーよなあ・・・」

「折角の合同授業だもんねー？」

あははは、と他愛無い会話で笑いながらも、小田の真っ赤な顔が頭から離れなかった。

第三話

どーしょー。

明日のLHRは席替えです。

折角小田と近いのに、これじゃー離れちゃうー。

どうしようか考えて、そうだと思い立つ。

クラスの奴らにメール送って回してもらった。

人徳あると、良いねー。

■ ■ ■

「いやー、小田と隣になれて嬉しいなー。後ろの席だしー」

自分で裏で手を回しておきながら、しゃーしゃーと言える俺の口。

小田はうんざりした顔で、ずっと黙ってる。

「小田さー、背大きいよねー？いくらあるん？」

無視。

「俺より10センチは高いよねー？180？俺まだ成長期だからすぐ追いつくよー」

「・・・うるっせー」

わお、低音ボイス。

不機嫌真っ盛り。

小田は毒づいて、机に突っ伏してしまった。

まー、いいさ。

次の席替えまで時間あるもんね。

■ ■ ■

「かがやんさー、どうしたの？」

屋上で弁当を食いながら、吉田が尋ねる。

毎週火曜は、俺と吉田、松本、林田の4人で昼食を取るようになっていた。

「どうしたの、って何がー？」

「小田にめっちゃ話しかけてんじゃない？」

「そーそー。小田、かなり不機嫌なのになあ」

「小田って、あの小田？」

一人だけ別のクラスの林田が確認する。

「そう。あの小田」

「かがやんさー、皆に根回しして、態々隣の席になったんだぜ」

「へえ。加賀って結構皆に好かれるのに、やっぱり小田には好かれてないか」

「てか、加賀がウザいんだよ。しつっこいのなんのって」

「え、うそー。俺ウザかった？」

「ウザい」

二人に断定されて、ちょっとショック。

そっかー、ウザかったかー。

だってさー、小田と会話したいから。

「どうしてそんなに会話したいわけ？」

「それはー……」

林田の問いに答えかけて、止まる。

「それは？」

「ん、なんでもない。なんとなく」

んだよー、とか言われる。

でも言えない。

小田の真っ赤な顔が可愛かった、なんて。

第四話

「小田くん、掃除しなきゃーだめよー？」

昇降口で、掃除をサボって下校しようとする小田を呼び止める。

うちの学校は掃除が終わったら自由下校なので、先生に気付かれなけりゃ問題無いんだけど。

同じ班だからさー。

「俺達、今週の掃除担当はココなんだよねー。と、いうわけで、はいコレ」

箒を手渡す。

小田は箒を受け取り、何をするでもなく、ただ突っ立っていた。

まあ、今まで掃除をしていなかったんだから、ちょっとした進歩だよー。

■ ■ ■

掃除が終わって皆帰ったのに、小田はぽつんと立ったまま。

「どーしたの？」

聞いたら、ずい、と箒を目の前に突き出された。

「これ、どこ？」

「ああ、掃除用具入れね。これこつち」

今年に入ってから、掃除用具入れの場所が変更になったんだよねー。

ちよつと陰に入つてて、見つけにくい。

「ここねー」

教えたら、ちゃんと箒を掛けてくれた。

「うんうん、やればできる子だねー」

「・・・殴られてえのか、てめー」

「んー？褒めてるつもりなんだけどなー」

不機嫌な顔。

また、あの真つ赤な顔、見たいなー。

手を伸ばしたら、察知されて避けられた。

から、腕を掴んで引き寄せる。

やわらかい髪を撫でると、すぐに真つ赤になった。

「ねーねー、なんで赤くなるの？怒ってるんじゃないよね？怒ってるなら、いっつも真つ赤なはずだもんねー？あ、照れてるんだ？」

「・・・うるせー」

あー、やっぱり可愛い。

抱きついたら、思いっきり突き飛ばされて尻餅ついた。

「いててて」

小田が隣を走り去って行ったのが見えた。

あー、怒らせちゃった。

■ ■ ■

「はい、ストロップ」

「！」

今日も昇降口で立ちふさぐ。

「駄目だよー、掃除してから帰ろっねー」

ココ掃除の時だけでも一緒に。

掃除を口実にするのは、俺の狡さ。

第五話

夏休み明け。

一週間後にあるのは文化祭。

あっちー。

普通、秋にやるもんじゃないのかなー？

飲食物、腐っちゃっ心配が出てくるよねー・・・。

■ ■ ■

「うちのクラスは昇降口と校門の飾りつけ担当です！とりあえず、大量に花を作るって事で！！」

元氣な委員長に誰も反抗することなく、黙々と花紙で花を作っている。

「青色なんてあつたんだー」

「色混ぜようぜ。5色5色！ー」

「緑だけって、レタスじゃねー？」

わいわいがやがや、教室中が五月蠅い。

まー、こういう喧騒は嫌いじゃないけど。

「小田は文化祭、何か出ないのー？」

隣の小田に声を掛ける。

あの後また席替えがあっただけ、また手回しして隣になった。

どうして、とか聞かれても分からないんだけど。うーん、なんとなくっていうのが一番当たってるような気がする。

小田、なんか可愛いし。

「バンドやってそうないメージだけどー」

やっぱり無視。

しょうがないから、自分の報告。

「俺はねー出るよー。3組の奴らとねー。ベースなんだー」

「えー、まじ！？加賀くん出るんだー。絶対見に行くから」

クラスの女子が、予想以上の反応。

「おー、待ってるわー」

手、ひらひら振って、花を折るのを続ける。

「小田もさー、見に来てよー」

「・・・うるせーなあ」

「えへへー」

声聞けた！。

なんか、小田の声を聞くのが毎日の楽しみになってきているかも。

だからウザいくらいに話しかけてしまうのかも。

「うわ、加賀キモい」

前から松本が茶々を入れる。

「ひでー」

第六話

「やつべーよ！かがやんカツコイイ！！」

「女の子キヤーキヤー言つてたぞ！！」

松本と吉田がすごいテンション高い。俺も人のこと言えないけど。

「えー、ボーカルにでしょー？」

「なんだよー、素直に喜べよー！」

ヤバイ。ちょーうれしー。

体育館の隅に小田が居た。

気のせいかもしれんけど、こっち見てた。

と思う。

なんかもー、成功したハイテンションのせいで神経が昂ぶってる。

「俺達これから力キ氷食いに行くけど、かがやんも行く？」

「あー、俺ちよつといいわー。適当に回ってくるねー」

「わかったー」

■ ■ ■

「あー、いたいた」

階段を上ると、屋上の入り口に小田がひとり座っていた。

一般入場者は3階以上は立ち入り禁止だし、殆どの生徒は祭りを楽しんでるしで大分静かった。

「見に来てくれたでしょー、ステージ。ありがとねー」

「・・・なんで隣に座るんだよ」

「いーじゃん。大体屋上出たら暑いつてー。小田はもう色々食べたー?」

顔を覗き込んで言ったら、少しうろたえて口を開いてくれた。

「・・・食ってない」

「じゃあさ、じゃあさ、俺と一緒に回ろうよー。俺もステージの準備でまだ回ってないんだよねー」

「・・・一人で行ってこいよ」

「やだー。一人は寂しいもん」

「もんとか、きめー。大体オトモダチくらいいっぱいいいんだろつよ。そっちを誘え」

「小田もオトモダチでしょー?」

「はア!？」

「だってほら、こんなにいっぱい喋ってるじゃん。俺こんなに喋ってる小田、見たことねー」

言ったら顔が真っ赤になった。

自覚無かったのかなー？

「ねー？オトモダチだよねー？」

「・・・ちがう」

体育座りして顔を埋める。なんかその仕草可愛い。

「違うないー。俺がオトモダチと言ったらオトモダチ」

どうしても顔を上げてくれないから、後ろに回って覆いかぶさった。

「!？」

「オトモダチって言うまで離さないぞー」

「お前、マジウゼエ・・・ッ!！」

結構本気で暴れられた。

「わわわ、危ないって」

から、胸のあたりで腕回して抱き寄せた。

「あははー、抱っこみたいだねー」

横顔を見たら、耳まで真っ赤になってて。

「あはは、真っ赤だー」

「ツッ！！ふざけんなよ、てめー！！なんだよ前からいつつもいつも！！席替えする度にお前が隣だし！頭とか撫でるし！話しかけてくるし！抱きつくし！！」

「だってー。小田と仲良くなりたいたいんだもん」

「俺はなりたくねえ！！」

「オトモダチにならないと、ちゅーするぞー」

「マジでキモい！てか、痛え！！」

小田の首を捻って後ろ向かせようとした。

「実力行使」

「うわー！やめ、やめろー！！」

そこまで抵抗されると傷つくというか。

「じゃー、オトモダチね」

「脅しだろそれ！！」

「ちゅーか一緒にポップコーン買いに行くか！さあどっち！！」

「ココにいる！！」

「それはちゅーってことですねー」

「ふッ・ぎッ・けッ・んッ・なッ！！」

第七話

メリークリスマス

とか言つて、皆愛する人とイヴを過ごしたいらしいから、皆で集まつたのは23日。

イヴイヴだー！！とか騒ぎながらカラオケになだれ込む。

途中、戸田の同中の女子が三人乱入してきて、彼女欲しがってた委員長はやけに紳士っぽい。

流行歌から懐かしアニソンまでゲラゲラ笑いながら歌いまくった。

「加賀くんおつきいねー！！良いなあ、いくつ？」

「んとねー、77」

「うっそ、かがやんいつの間に伸びたん！？」

「先週測つたらなつてたー」

小田との目線が近付いてきた。

■ ■ ■

「わー、やっぱり寒いねー」

イルミネーションが華やかな駅までの道を歩く。

突然、酷い喧騒が聞こえた。

「何？ケンカ？」

「うわー、あそこじゃない？ほら」

ヤジ馬根性で背伸びする。

「・・・え、ちょっと、あれって小田じゃね？」

「ええ？まさかあ。って、加賀！？」

身体は勝手に飛び出していた。

■ ■ ■

見間違えるはずも無く、喧嘩していたのはやっぱり小田で。

何があつたのか3人も相手にしていて。

殴られて尻餅をついた。

ギャラリィが沸く。

囲まれて、なにやってんだ小田！！

「ッ！！」

「・・・んだあ、お前！！」

「いやー、3対1はちょっと酷いかなーっていつか、今日はこの辺でお開きーってことで」

相手の拳を受け止めた手のひらが熱い。

「ふざけてんじゃねーぞッ!」

後ろからケリ入れられる気配がしてかわして足を払った。

「行くぞ!」

呆けていた小田の襟を掴んで引つ張る。

逃がすか!とか聞こえたけど、警察も来たからなんとか逃げ切れると踏んで、もう一人転ばして走りまくった。

■ ■ ■

「はあ、はあ、……ちよつ、あれ、何?」

公園に入って、芝生の上に寝転んだ。

あー、久々に走ったら肺いてー。

「知らねー……、いきなり、つかかってきやがって、くそ」

「でも、まあ、怪我無さそうで、良かったー」

変に笑いがこみ上げてくる。

「余計なこと、してんじゃねー、よ」

「気にすんなってー。俺の自己満足だからさー。ツツ!？」

笑いながら起き上がったら、いきなり押し倒された。

「ふざけんのも大概にしろよ!俺のせいでお前になんかあったら、俺の寝覚めが悪いだろうがツ!！」

えー、それって、その、つまり

「心配してくれたの？」

ぱつと顔が真っ赤になって、飛び起きた。

「んなつ、んなワケねーだろ!！ただ俺の寝覚めの問題で・・・ツ
!！」

「うわー、うれしー」

「だからツ!！」

小田が怒鳴りかけたところでケータイが鳴った。

「うお、ちよつとごめんねー」

開くと吉田から着信だった。

「はい、もしもしー？」

『かがやん！？無事！？』

声が凄く焦ってて、随分心配かけたんだなーと思う。

「無事でーす。ごめんねー、心配かけてー」

『ほんツツツとだよ、このバカ！！すぐ警察が来てだなあ、結構騒がしかったんだぞ！』

後ろから、他の奴らの声も聞こえる。

『まあ、お前なら無事だろうとは思ってたけど！・・・はあー。良かったー・・・。で？やっぱり小田だったんだろ？小田も無事？』

「うん、無事無事。本当にごめん」

『無事ならいいよ、もう。小田も無事で良かったって伝えといて。こっちはこっちで解散するからな』

「うん、わかった。ありがとー。ほんじゃあね」

ケータイを閉じてから実感する。俺、結構無茶したんだなー。

最近は平凡な生活送ってたしなー・・・。

「すげーな、心配されてて」

どこか鼻白んだ様子で、小田が言う。

「遊んで帰る途中だったからさー。吉田が、小田も無事で良かったって」

それを聞いて、小田の顔が赤くなった。

あれ？

なんか、嫌っていうか、なんて言うか。

あれ？

第八話

2月14日。

女友達が義理チョコくれたりして、まあ、なんとなく嬉しい鞆の中。

「あの、加賀君。ちょっといいかな」

今帰ろうと思ってたんだけどー。

でもまー、その子が何を考えてるか分かるから無下にはできなくて、下駄箱に外履きを戻す。

「んー、なにー？」

あえてすつとぼけてみたり。

・・・ひでーやつ。

■ ■ ■

あーいう緊張した空気、好きじゃないな・・・

屋上へ向かう階段の踊り場で告白された。

やんわりと、断った。

なんだか弱く見えて、ちょっと罪悪感。

「断っちゃって、良かったのかよ」

「!」

3階の入り口にもたれるように、小田がいた。

「吃驚したー……。あー、聞いてた？」

「いいや。通りかかったら泣いてる女子とすれ違ったから、どんなヤローが振ったのかと思ってさ。まさか、お前とはねー」

笑ってらー。

「初めて見るわ、小田の笑ったところ」

カアツ、と薄暗い中でも顔が真っ赤になったのがわかった。

「そんなのはどうでも良いんだよ！」

「あー、小田にはね。俺にはどーでも良くないんだけどー。ま、いっかー」

階段を下りて、小田の前に立つ。

小田もまだ成長中で、やっぱりまだ目線が合わない。

「なんだっけ？振って良かったかって？あー、可哀想とも思っただけどー、今は欲しくないからー」

「ありえねーだろ」

「今はー、目下小田くん親密度アップ中だからー、ありえるの」

「なッ」

かーわいー。

なんで、可愛いつて思っちゃうんだろ？

第九話

「今日、小田来ないな」

「かがやん寂しいな、平気かあ?」

雪が降ってるから、この時期は多目的教室で昼食をとる。

「あー、多分それ俺のせいだわー」

頭のほぼ全てを占めるのは小田のことだ。

「えー?何したん?」

「んー?ちゅう」

見開かれた目が六つ。

怖いなー。

「えっ!?!」

「マジで!?!したの?」

「したー」

「え、なんで?なんでそういう流れになるの?」

「なんかー、可愛かったからついー」

ウインナーを口に運ぶ。

昨日あの後。

可愛くて、なんかキスしてた。

小田は目を見開いて、一拍置いていつかのように突き飛ばされた。

・・・腹に一発お見舞い付きで。

「てことは、かがやんの意思のみ？」

「小田怒ったつしょ？」

「腹に一発。痛かったよー・・・」

「当たり前だ、バーカ」

なんか、松本の言葉がすっごい心に刺さるー。

「何、デープ？デープ？」

吉田はなんだか面白そうに突っ込んでくるし。

「お子様ちゅうー」

「あー、それなら、立ち直れるよなあ」

「多分」

「何、加賀は小田のこと好きなの？」

・・・好き？

「考えてなかった」

「ハア！？」

「あー、俺・・・、好きなのか・・・？」

どうなんだろう。

「えー・・・。あのさあ。・・・小田も報われねーっていうか、なんていうか」

「小田が可哀想になつてきた・・・」

林田だけは何も言わずに、どこか笑いを含んだ顔でこっちを見ている。

「なんだよー、林田ー」

「別に」

「俺、好きなのかなー？」

「ふざけてでもなくて、純粹に男にキスしたいなんて思うのは、俺

は好きだからだと思う」

「林田……。お前の助言は、身にしみるな……。」

「そりゃ、どーも」

今度は確実に笑ってやがる。

第十話

「あー、小田おはよー」

教室に入ってきた小田は、ぎく、と少し立ち止まった。

うー・・・

「・・・ごめんね」

むっすー、として。無言で座っちゃったー。

それから、始終黙ってた。

あー、なんて言えばいいのか。

俺は。

どうしたらいい？

■ ■ ■

「小田、今週はここ掃除なんだよー」

いつかのように、帰ろうとする小田を引き止める。

小田は今日は完全無視を通そうとしているようで、脇を通り過ぎて行く。

「待つて」

腕を掴む。

振り払われそうになるから、力を込める。

「ッ！！」

「話したいことがあるから、待つて」

「んだよ、離せ。俺には話したいことなんて無い」

「俺にはあるんだ」

「知らねえよ！」

キツ、と睨まれる。

知らず、俺の目つきも険しくなる。

「あの、加賀くん？」

振り向くと、どこか怯えた女子がちよつと後ずさつた。

「あの、掃除終わったから、・・・私たち帰るね」

「あー、ごめんね、掃除してなくてー。あつ、邪魔になつてるね、ごめんー。またねー」

顔を緩めて返事したら、ほつとした顔をして、俺達が塞いでないド

アから出て行つた。

「おい、離せよ」

「嫌だ」

小田の手を引つ張つて、掃除用具入れの陰まで行く。

「聞いて欲しいことがあるんだ」

「俺は帰る。離せ」

「聞いてくれ！」

どんつ、

壁に押し付けたら、驚いた顔をされた。

その顔も、見たこと無い。

「俺さ、昨日考えたんだよ。始業式の日から小田にちよつかいかけ
てたのとか、席替えて手回ししてずっと隣の席になつてたのとか、
真つ赤な顔が忘れられないのとか、可愛いと思うこととか、抱きし
めたのとか、・・・一昨日のキスとか」

小田の顔が、真つ赤に染まる。

「男にキスしたいとか、本気で思つて無いだろ。でも俺は小田に
本気で、純粋にキスしたいって思った。だから、つまり俺は、小田
のことが好きだ」

そこまで言ったら、小田の顔がふと歪んで、顔をそらされた。

「ふざけんな。あれだろ、なんかの罰ゲームとかでやらされてんだろ。いい加減にしるよな、ンッ」

口を塞いで唇を舌でなぞる。

歯列をなぞって、口腔に侵入して舌を絡ませて

「イツ」

噛まれた舌が痛くて、涙が出てくる。

「ふざっけんなッ、って言ってんだろぅが!!」

「・・・ふざけてない」

「だったらっ、謝んじゃねえよ!」

「は? 謝る?」

「朝!」

言われて、脳みそ回転させて、気付いた。

そっぴゃ謝ったっけ。

思い出した俺の顔を見て、小田は続ける。

「俺のこと好きならなあ、俺が嫌がろうが何しようが謝るんじゃない
え！」

「え、・・・小田って、M？」

・・・殴られた。

っていうかそれって

「え、何、俺が好きでいて良いってこと？」

これ以上無いくらいに真っ赤。

「小田は？俺のこと好き？好きでしょ？だから謝られてショックだ
ったんでしょ？ね？好きでしょ？」

「嫌いだよ！」

「じゃあ、好きになって」

また、唇を重ねて。

舌を絡ませて。

心臓が高鳴るままに。

身体が熱くなるままに。

■ ■ ■

そのままの流れで、一緒に下校。

何を話すでもなく、ゆっくり歩いた。

「・・・そういやさっき、お前、なんて言った？」

「えー？」

「『席替えて手回ししてずっと隣の席になってた』？」

「あー、そうだよー？」

ぴたっと、隣で立ち止まる。

振り返れば、ワナワナと震えていた。

「え、気付いて無かったのー？だってー、偶然にしちゃありえない
ついたー！」

頭っ、英単語が抜け落ちた・・・っ

「偶然だと思ってたのに・・・っ」

「えー？あ、もしかしてー、運命、とか思ってた？」

「うるっせーっ！ー！」

もう一発お見舞いされそうになったから避けた。

「顔、真っ赤ー。照れてるんだー」

「ちげえよ!!」

抱き込んで、耳に口をつける。

「その顔、俺以外に見せないでね」

「ちよつ、バツカ、お前！此処は往来だ!!」

「誰も居ないって」

住宅街だし。

「でも、これ、約束して？誰か他の人にその顔見せたら、俺嫉妬でそいつ殺しちゃう」

「・・・ばーか」

「ばかでいいよ」

小田のことだから。

第十話（後書き）

ここまで読んでくださって有難うございます。
なんとかくつき（？）ました。

モノカキのリハビリに書いてみました。

ていうか、もうちょっと短いの書こうと思ってたのに、なんだか長
くなった。

あれえ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8498f/>

小田と加賀。

2010年10月14日22時02分発行